

1 コウボク末

2 定量法の項を次のように改める。

3 定量法 本品約0.5 gを精密に量り，薄めたメタノール(7→10)
4 40 mLを加え，還流冷却器を付けて水浴上で20分間加熱し，
5 冷後，ろ過する．残留物は，薄めたメタノール(7→10) 40
6 mLを加え，同様に操作する．全ろ液を合わせ，薄めたメタ
7 ノール(7→10)を加えて正確に100 mLとし，試料溶液とする．
8 別に定量用マグノロール約10 mgを精密に量り，薄めたメタ
9 ノール(7→10)に溶かして正確に100 mLとし，標準溶液とす
10 る．試料溶液及び標準溶液10 μ Lずつを正確にとり，次の条
11 件で液体クロマトグラフィー〈2.01〉により試験を行う．そ
12 れぞれの液のマグノロールのピーク面積 A_T 及び A_S を測定す
13 る．

14 マグノロールの量(mg) = $M_S \times A_T / A_S$

15 M_S : 定量用マグノロールの秤取量(mg)

16 試験条件

17 検出器：紫外吸光光度計(測定波長：289 nm)

18 カラム：内径4～6 mm，長さ15～25 cmのステンレス
19 管に5～10 μ mの液体クロマトグラフィー用オクタデ
20 シルシリル化シリカゲルを充填する．

21 カラム温度：20 $^{\circ}$ C付近の一定温度

22 移動相：水／アセトニトリル／酢酸(100)混液(50 : 50 :
23 1)

24 流量：マグノロールの保持時間が約14分になるように
25 調整する．

26 システム適合性

27 システムの性能：定量用マグノロール及びホノキオール
28 1 mgずつを薄めたメタノール(7→10)に溶かして10
29 mLとする．この液10 μ Lにつき，上記の条件で操作
30 するとき，ホノキオール，マグノロールの順に溶出し，
31 その分離度は5以上である．

32 システムの再現性：標準溶液10 μ Lにつき，上記の条件
33 で試験を6回繰り返すとき，マグノロールのピーク面
34 積の相対標準偏差は1.5 %以下である．

35

36